

## 参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「漠たる不安と向き合いながら」
著者 / 所属	三瓶 朋秀 / 内閣委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	482号
刊行日	2026-3-16
頁	2
URL	<a href="https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20260316.html">https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20260316.html</a>

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75020) / 03-5521-7686 (直通))。

## 漠たる不安と向き合いながら

内閣委員会 専門員

さんべい ともひで  
三瓶 朋秀

情報通信技術の飛躍的な発達に限らず、日常生活上の様々な制度や概念、身近な会話での言葉遣いに至るまで、近時の我が国の社会経済情勢の変化はとどまるところを知らない。新しい変化にやっと慣れたと思ったら次の変化が押し寄せるというサイクルが、自身の加齢に伴う適応力や判断力の低下と相まって、加速度を増しているように感じられる。

しかし次々と押し寄せる変化の波により社会環境が全面的・抜本的に改善され、誰も将来の明るい展望を抱くことができるようになったかと問われれば、そうとも言えない。

「失われた〇〇年」と称されるように、バブル経済崩壊以降、我が国社会全体に閉塞感、停滞感が滞留し、現在もなお将来への漠たる不安が人々の心に重くのしかかっている。

その最大の理由は、画期的な技術革新等をもってしても全面的に解決されることなく長年にわたり社会に横たわり続けている深刻な社会課題の存在だろう。例えば少子高齢化や人口減少等をめぐる状況は、長期間にわたる各種の取組にも関わらず反転する兆しが見られず、社会保障制度を始め諸制度の持続可能性も懸念され、企業活動や個人の将来設計に大きな不安を落としている。また、気温上昇はもはや「温暖化」ではなく「沸騰化」と称されるまでに至り、自然災害の激甚化に伴い命の危険を感じる頻度も増えた。また、財政に目を転ずれば、これも長年にわたり指摘される巨額の債務残高が解消される方向性が見通せず、今後の在り方が心配になるのは自然なことだろう。

少子高齢化が進展する中で、こうした社会状況の受け止め方は世代により様々であろう。例えば右肩上がりの経済を経験することもなく、これらの不安が横たわる社会で生まれ育った若年世代と、経済成長が著しかった昭和世代とで受け止め方が異なるのは当然だ。前者が後者をアナログ・感情的・根性主義などと、一方で後者が前者を無気力・諦念・諦観などと批判していても、世代間の社会観・価値観の乖離が増幅するばかりで生産的ではない。今後の社会の構築に向けて今まさに必要なのは、人口動態、環境問題、経済財政状況、国際社会の動向等を見通しつつ、これまでの各世代が過ごしてきた社会的・時代的背景を踏まえながら将来世代の行く末までを視野に入れた上で、遡って現時点でどのような対応ができるのか、必要な座標軸を設定し、時には修正を加えつつ、着地点を探りながら我慢強く模索していく、ということに尽きるだろう。

時代の変化がますます速くなっているとは言え、複雑化・多様化する社会状況を瞬時かつ永続的に改善させるような抜本的な変革を期待するのも現実的ではない。議会活動を補助する我々事務局の調査スタッフにとっても、新しい情報やツールに安易に飛び付くだけでなく、時間軸の流れの中で中長期的な視点も併せ持ち、日々試行錯誤を繰り返して粘り強く地道な努力を積み重ねる重要性を改めて認識し、自戒に至った次第である。